

地域 ケア 会議

もっとよくする
ヒント集

東北地方版

100歳まで自分らしく暮らせる
地域づくりを実現するために

100歳まで自分らしく暮らせる 地域づくりを実現するために



地域包括ケアシステムが提唱されてから約20年。

市町村では、それぞれ**地域ケア会議**や**生活支援体制整備事業**を立ち上げ、**生活支援コーディネーター**を配置して、地域でできることを模索してきました。

東北では、高齢化が進んでおり、若い世代の減少とともに、単身・高齢夫婦のみの世帯が増加しています。もちろん医療・介護サービス資源も限られています。多くの高齢者は、重度の要介護になったら入所・入院、それまでは家族に頼ってなんとか生活していますが、もはや限界に達しています。これまでの病院・施設や家族に依存した介護福祉ではなく、地域包括ケアシステムを構築することが求められます。地域に即したシステム構築のためには、「まず何をすべきか？」課題を洗い出し、優先順位をつけて役割分担することが必要です。

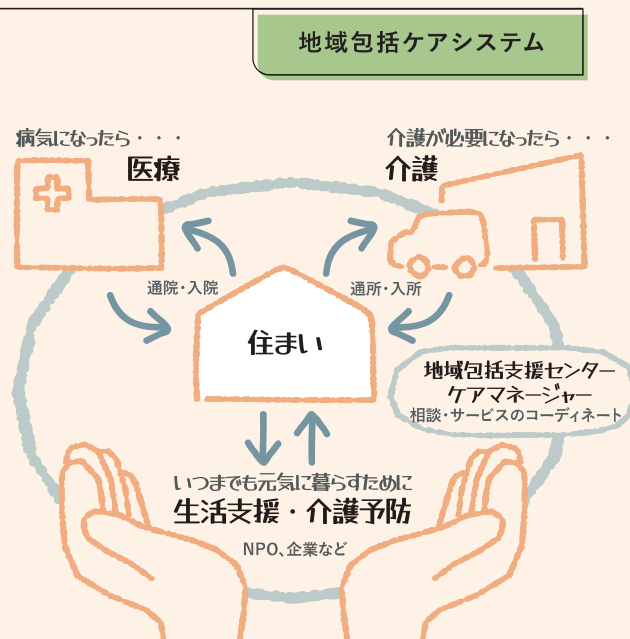
そのために、**地域ケア会議**の仕組みを持つ市町村と、地域の状況をよく知っている**生活支援コーディネーター**が協働できる体制をつくることが重要です。このパンフレットでは、この2者の関係を整理したうえで、地域の関係者がよく話し合い、政策の形成につながる地域ケア会議を目指すためのヒントをまとめました。

1/ これからの地域づくりで大切なこと

「100歳まで地域で暮らす」ための地域づくり

「地域包括ケアシステム」とは、高齢になっても、病院や介護施設に入院・入所したきりではなく、地域で暮らし続けることを目指した考え方です。

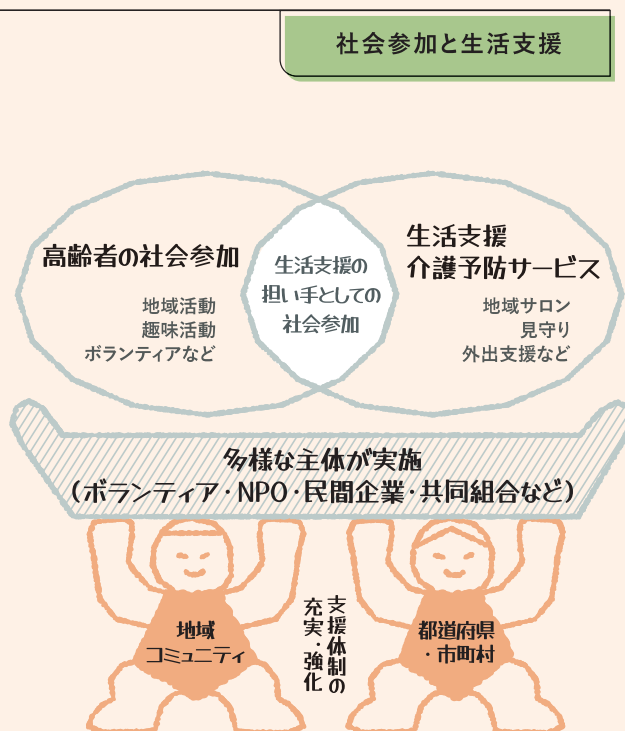
地域の住まいを中心に、いつまでも元気に暮らすための生活支援・介護予防、病気になったときは医療、専門的な介護が必要になったときは介護サービスと、それぞれ必要な支援やサービスが受けられるような地域をつくるという考え方です。



活動できる機会を増やす&生活上の困りごとを支える

高齢者は特に、居場所がない、買い物やごみ出しが不便など生活でのちょっとした困りごとへの「生活支援」が必要になります。また、心身の機能が低下しないよう、若い世代以上に意識的に人とつながり、自分なりの役割を持つ「社会参加」も必要です。

そのために、地域では、介護サービス事業者だけでなく、住民、商店、生協、社会福祉法人、NPOなどさまざまな関係者ができることに取り組む必要があります。そして、市町村にはそれらの活動をサポートしたり、応援したり、協働する役割があります。



住民を中心に支え合いの体制をつくる

社会参加と生活支援のできる地域の支え合いの体制をつくるために、住民の中に入って協働する存在が生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)です。大きく3つの役割があります。

- 1 住民が必要だと感じる取組を創出する
「資源開発」
- 2 関係者同士、顔の見える関係をつくる
「ネットワーク構築」
- 3 必要とする住民が資源を利用できるようにつなげる
「マッチング」

住民が主体となって取組を進めることが肝心です。そのため、お互いに知恵を出し合って話し合えるゆるやかな場「協議体」をつくります。

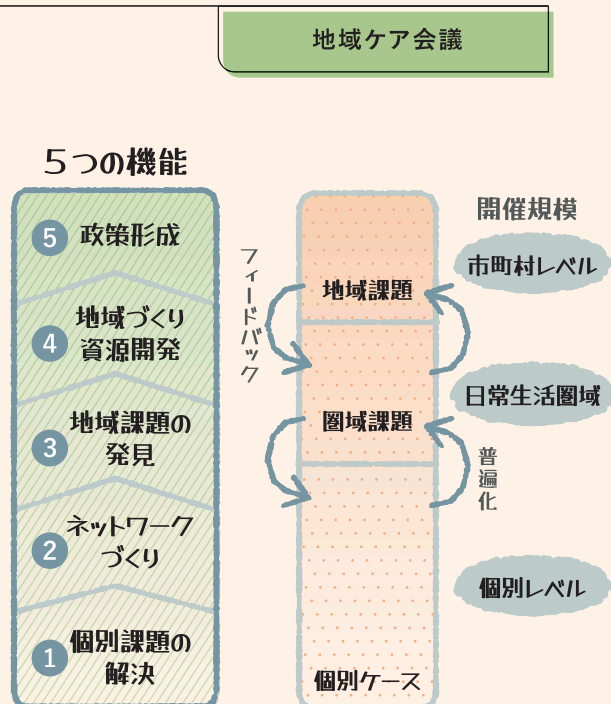


関係者が自立支援について考える

市町村は、包括的・継続的ケアマネジメント支援業務の効果的な実施のために、地域ケア会議の設置に努めることとされています（介護保険法第115条の48第1項）。

地域ケア会議には「個別課題の解決」「地域包括支援ネットワークの構築」「地域課題の発見」「地域づくり・資源開発」「政策の形成」の5つの機能があります。

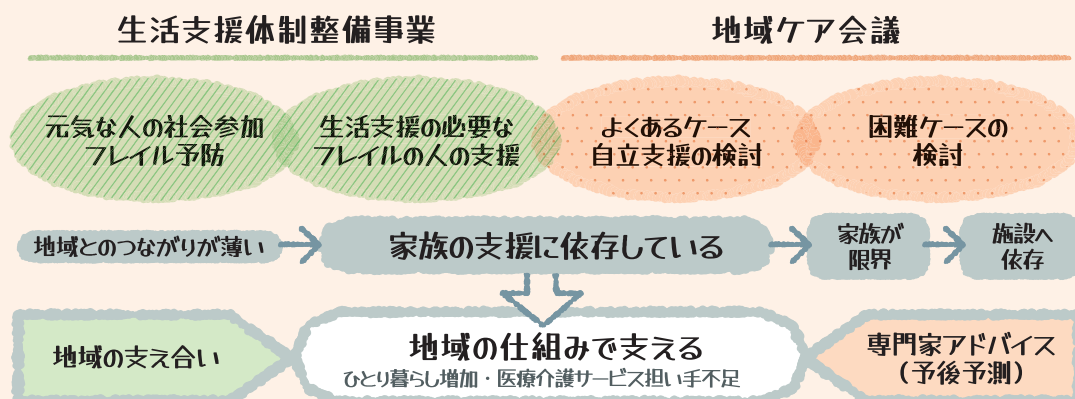
地域課題の前に個別の事例を検討する仕組みになっていることが重要です。いきなり「地域の課題は何?」と考えるのではなく、「Aさんは今こんなことで困っている」「Bさんにこんな支援がしたかったけどできなかった」など、個別ケースを通じて関係者の間で具体的な経験が共有できると、自立支援策が自然と具体化していきます。



その人の地域での暮らしを考える

東北では家族が近くにいない世帯が増え、いざというとき頼る先のない人が増えています。一方、介護や医療の資源はますます限られてくるので、介護度の高くない人を受け入れる余裕が施設や病院にはありません。家族ではなく本人の意思を聞きとり、社会参加（役割）を促すこと、施設・病院ではなく地域で暮らすためのアドバイスが大切です。

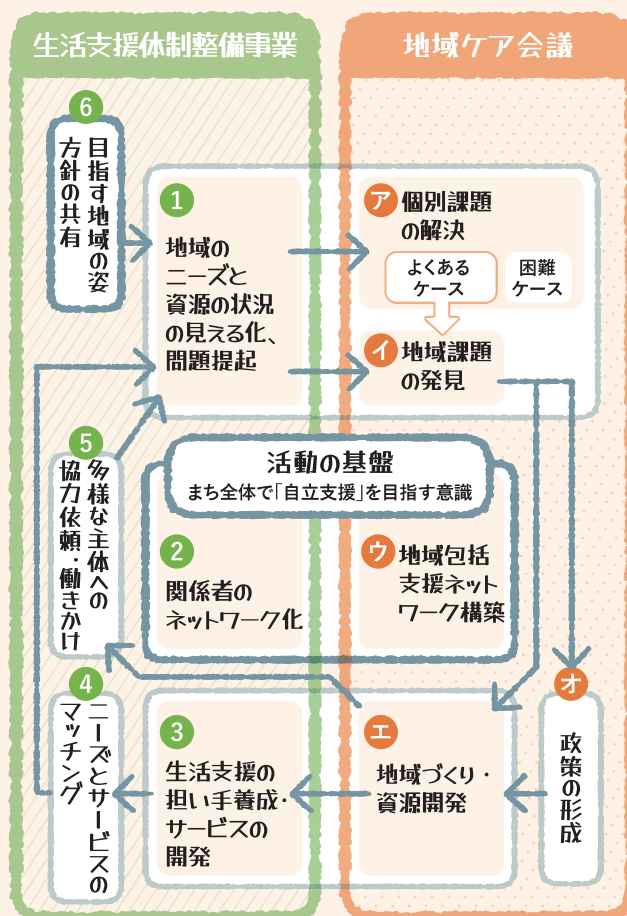
このような地域で共通する「よくあるケース」の人を、家族の力に頼らず地域資源や社会サービスで支えていくために、生活支援体制整備事業と地域ケア会議の協働が不可欠です。生活支援体制整備事業では、社会参加やつながりづくりについて住民同士で話し合い、心身の機能が落ちてきた人でも使える地域の資源を増やしていきます。地域ケア会議では、専門職による予後予測と、生活支援コーディネーターの地域資源の視点を活かし、「よくあるケース」の人に必要な支援を考えます。



2/ 地域ケア会議と生活支援体制整備事業の関係

地域ケア会議における課題の抽出と生活支援等の地域の資源づくりのあるべき関係性は、次のとおり整理できます。

- 1 「よくあるケース」の個別事例を検討します **ア**。ここで、生活支援コーディネーターは地域をよく知る立場から地域資源を活かす視点を提供します **1**。
- 2 ケース検討を通して重複する内容から課題を抽出します **イ**。生活支援コーディネーターは、地域の住民のニーズをよく知る立場から気づいたことがあれば問題提起します **1**。
- 3 課題のうち、行政で対応するものは政策形成 **オ**、地域で対応するものは地域づくり・資源開発 **エ**を進めます。このときの政策には、「地域づくり・資源開発」を支援する政策も含まれます。
- 4 地域づくり・資源開発にあたっては、担い手の養成・サービス開発 **3** や多様な主体への働きかけ **5** が必要になります。
- 5 新しく資源が生まれると、地域でさらにニーズとサービスをマッチングできるようになります **4**。そして具体的なマッチングを通して「こんな人は今あるサービスが使えない」など気づきを得られます **1**。



これらの活動の基盤となるのが、会議や協議体での話し合いや交流を通じてつくる信頼関係です **2** **ウ** **6**。このように、地域ケア会議と生活支援体制整備事業は、それぞれの活動をするうえで切り離せない関係にあります。事業の関係者がそれぞれの事業の内容を理解し、協働する姿勢を持つことが非常に重要です。



鶴山 芳子さん

Yoshiko Tsuruyama

公益財団法人さわやか福祉財団
常務理事・共生社会推進リーダー

地域ケア会議と協働し地域づくりを進める 生活支援コーディネーターと協議体

急速な人口減少により、町内会が解散するなど地域のつながりは希薄となり、家族機能はほとんどない地域も増えています。「つながりの再構築」「家族のような助け合い」が求められる今、一定の住民にお願いするだけでは地域づくりは進まない。広く住民に働きかける「仕掛けと仕組みづくり」が必要で、その役割機能を果たすのが生活支援コーディネーターと協議体です。生活支援コーディネーターは住民の「困りごと」や「やってみたいこと」を引き出し、身近なエリアで住民たちが地域のことを話し合う協議体は住民意識を醸成し、住民主体の地域づくりを推進します。

地域ケア会議と協働することで、今後求められる地域づくりを推進します。住民がいきいきと暮らし続けられる地域づくりを共に目指しませんか。

3/ 地域の課題を見つける会議のポイント



会議の枠組みにこだわらず、いまある会議体を活かす

地域ケア会議として、個別ケースの検討を行う個別ケア会議、地域課題の検討を行う推進会議の2つに分けて開催していることが多いようですが、会議の位置づけや検討されている内容、会議の参加者は、市町村によって様々異なります。地域ケア会議のそれぞれの役割(4ページ記載)を持たせられていれば、新たな枠組みにこだわらず、いまある地域ケア会議以外の会議体を活かす考え方もあります。



困難ケースだけでなく「よくあるケース」の検討を重ねる

要介護度が比較的軽度の「よくあるケース」の検討からは、地域に共通性のある課題がよみとれます。会議のたびに事例を抽出するのが難しい場合には、1つのケースについて複数回検討しても構いません。事例の変化を確認でき、成果の共有が参加者のモチベーションアップにつながることも期待できます。よいことばかりでなく、うまくいかないところをこう改善してよくなったというケースからは、多くの学びがあります。



地域との情報共有や政策反映の道筋をつくっておく

地域ケア会議で見つけた課題を地域資源の開発や政策提言につなげられるように、会議で話し合った内容を、地域の住民(協議体等)に共有する流れや、行政の動きに反映する流れをつくることが重要です。市町村の職員は、地域の課題と解決の方向性を十分に理解したうえで事業や政策の検討ができます。地域ケア会議が、着実に地域づくりや地域包括ケアシステムの構築につながることを実感できると、より意欲的な取組になると考えられます。



服部 真治さん

Shinji Hattori

一般財団法人医療経済研究
社会保険福祉協会 医療経済研究機構
政策推進部 副部長
研究部 主席研究員

なぜ「よくあるケース」なのか、 そこからどう地域課題を見出すのか

地域ケア会議を開催していても「個別ケースの検討に終始し、地域課題の把握、その後の取組につなげていない」という声を多く耳にします。

そもそも政策とは、多数の住民の困りごとに対応するために作られるもの。市町村が地域ケア会議に「政策形成」や「地域づくり・資源開発」の機能を発揮させるためには、当然、数ケースの検討では情報が足りない。だから「よくあるケース」の検討を重ね、「蓄積する」必要があるのです。また現行事業の改善も「政策形成」の一つです。

個別ケースの検討においては、そこで出された助言を個別支援の改善に役立てるのはもちろんですが、大切なのは「なぜそのような状況が生じたのか」と問い、みんなで考えることです。「なぜなぜ分析」という、「なぜ?」を5回繰り返すことにより課題の根本原因(真因)にたどり着くという分析手法があります。「地域課題」にたどり着くためには、「なぜ?」を繰り返すことが重要です。

地域ケア会議に
参加する視点

check list

会議の参加者みんなでチェックしよう

✔ もともと、どんなふうに暮らしていたの？ 本人への理解を深める

- ☐ 本人が「どんな生活を送りたいか」(ニーズ)を本人の立場になってとらえよう
- ☐ 「もともとどんな暮らしをしていたか」を確認し、本人にとって「普通の暮らし」ができるように考えよう
- ☐ こだわっていること(専門職から見ると危ないけど、やめないこと)は、本人が「どう生きたいのか」を考える重要情報

✔ このまま過ごしたら、どうなる？ 予後予測

- ☐ 専門職のそれぞれの視点から「このままの生活を続けたらどうなるか」今後の見込みを共有しよう(予後予測)
- ☐ 「支援がない場合」と「支援・介入による維持・回復」の差(課題)を具体的にし、理想に近づける方法を考えよう
- ☐ ケアマネジャーが本人・家族と予後予測を一緒に考え共有できるようなアドバイスを考えよう

✔ 本人が、ゆとりを持って家でできることは？ 自立支援

- ☐ 「能力に応じて自立した日常生活が送れる」ように、自分でできることを活かした暮らしの支援を考えよう
- ☐ 病院や施設等、専門機関でできることに加え、「その人が生活している家の中でできることがないか？」を考えよう
- ☐ 「その支援は本人にとって本当に必要なの？」という視点でも考えよう
- ☐ 本人の「生きる力」を信じて、本人の生活の力を引き出す条件や前提を考えよう

✔ となり近所や地域でできることは？ 環境因子を考える・地域資源の活用

- ☐ 家族介護力を使わず、社会サービス(特に「となり近所や地域でできそうなこと」)の活用を前提に考えよう
- ☐ 地域をよく知る生活支援コーディネーターなどの知見を活かして、地域資源・社会サービスの活用を考えよう
- ☐ すぐできることが少なくても「こんなことができたらいいな」と思ったことを、地域づくりや新しい政策形成につなげよう

地域ケア会議は知恵を出し合う会議

間違ったことを言えないと思って、必要以上に緊張して参加していませんか？地域ケア会議は、本人の望む暮らしを考え、地域づくりを考える「知恵を出し合う会議」。お互いの話に耳を傾け、安心感を持って発言できる場をつくしましょう。

- 思い浮かんだ質問、解釈、仮説、意見など、どんな発言でも歓迎しよう
- 知らないこと、わからないことは『わかりません』で大丈夫
- 他職種間での顔の見える関係づくりが大切です

地域ケア会議

もっとよくする10のヒント

地域ケア会議を開催してみると、
準備や会議の進行、成果の活かし方など、
会議の運営が難しいと感じることもあります。
そんなときに役立つ各地の事例や、
改善のヒントを紹介します。



会議のプロセス

こんなお悩みから →

こんな会議にしよう

事前準備

情報収集
資料作成
会議設定
参加者調整

準備が大変

- 参加者は誰を呼びべき？
日程調整も大変 P8 ヒント1
- どこが問題？
何にアドバイスが必要？ P8 ヒント2
- 会議の準備や
資料づくりが大変 P9 ヒント3

参加者に求められている
ことをわかりやすく
情報提供する

当日運営

会場準備
進行
意見交換
とりまとめ

効果的な話し合いの場になっていない

- 会議の目的と
目指す成果が明確でない P9 ヒント4
- かたい雰囲気
会議になってしまう P10 ヒント5
- 意見を出しやすくするには
どうしたらいいの？ P11 ヒント6
- 話が別の方向にいつってしまう P12 ヒント7

目的を明確にして
参加してよかったと思える
成果が見える会議にする

会議後・地域づくりへ

記録作成
共有
モニタリング
フィードバック
事後評価

課題解決や政策提言にまでつなげられない

- 何から手をつけたらいいの？ P12 ヒント8
- 地域課題解決に
どうつなげたらいいの？ P13 ヒント9
- 地域づくりや政策提言にまで
つなげられない P13 ヒント10

地域の人材や
資源・課題を共有し、
活用できる会議にする

地域で安心して暮らしていく
イメージを蓄積し、
地域づくりにつなげていく

地域の事情やケースの内容に合わせて、
少人数でもOK！

事前準備

各地の事例

☐ ケースの内容に応じて召集

検討するケースの内容に応じて参加者を決めています。「こんな人を呼んだ方が良いのでは」と市から地域包括支援センターに助言をしています。 **宮城県石巻市**

☐ 会議は参加できる人で！

リハビリ等の専門職が村に常駐していないため、専門職の出席にこだわりすぎず、集まれるメンバーでケース検討の回数を重ねています。 **青森県蓬田村**

改善のヒント

☐ 他職種の人と気軽に連携できるようにしよう

- 連携がスムーズにできるように、少しずつ他職種とも関係をつくっていきましょう。

ケースの課題を整理し、
どの部分にアドバイスを求めているか伝える

事前準備

各地の事例

☐ 課題を事前に整理して提示する

地域包括支援センターの職員が、事前に各ケースの課題を自立支援の観点から整理しています。 **山形県長井市**

☐ 参加者に「こんなアドバイスをしてほしい」と事前に伝える

生活支援コーディネーターには、「こんな内容のケース検討があるので、生活支援コーディネーターの立場からこういう観点の助言をしてほしい」と事前に市から話しています。 **宮城県石巻市**

☐ 「アドバイスリスト」を整理してみよう

専門職に「聞いてみたいこと」や専門職が「アドバイスできること」がわかると、会議の出席依頼やアドバイスを求める時に役立ちそうですね。 **ワークショップのアイデア**

3

ヒント

お悩み 会議の準備や資料づくりが大変

資料は簡素でいいし、別の会議に合わせて開催してもいい

事前準備

各地の事例

□ 1ページ程度で必要情報をまとめよう

ケース検討の資料は詳細をもれなく伝えることよりも、話したい内容に応じた情報提供が大切。必要な情報を1枚程度の資料にまとめて示し、補足として既存資料を活用しよう。

ワークショップのアイデア

□ 既存の会議体を活かして地域ケア会議を開催

自立支援の議論をするために新たなケア会議を立ち上げるのではなく、ケアマネ連絡協議会の場を活用して自立支援型ケア会議を開催しています。

岩手県九戸村

改善のヒント

□ 同じケースの経過報告も大切

- 1ケースの検討は1回限りではなく、経過を確認することも大切です。話し合った課題への対応と変化を確認して、新しい状況について検討を深めることができます。また以前の資源を活用して準備を進められる利点もあります。

4

ヒント

お悩み 会議の目的と目指す成果が明確でない

会議の目的と目指す成果を目立つ位置に示しておく

当日運営

各地の事例

□ 地域ケア会議に参加する視点を再確認しよう

「地域ケア会議に参加する視点」(P6)を改めて確認し、それぞれの立場から意見を出し合おう。

P6参照

改善のヒント

□ 目的と目指す成果、プログラムを書き出して紹介する

- 今日の会議の目的と目指す成果、プログラム(時間割)を貼り出そう。
- みんなが見える位置に時計を置こう。



みんなで協力して、 前向きに検討する雰囲気をつくる

当日運営

各地の事例

□ 堅苦しくせず、みんなで考える場づくり

堅苦しくせず、限りある市町村内の資源の利活用をみんなで考える場づくりをしています。そのためには、参加者同士が顔見知りの関係であることも重要です。

岩手県九戸村

改善のヒント

□ 進行を複数人で分担してみよう

- 会議の進行役、意見の記録役、時間管理役などの分担を決めて、みんなで協力して進行しよう。
- 運営側は、みんなが意見を出しやすくなるよう「笑顔」と「うなずき」を大切に。

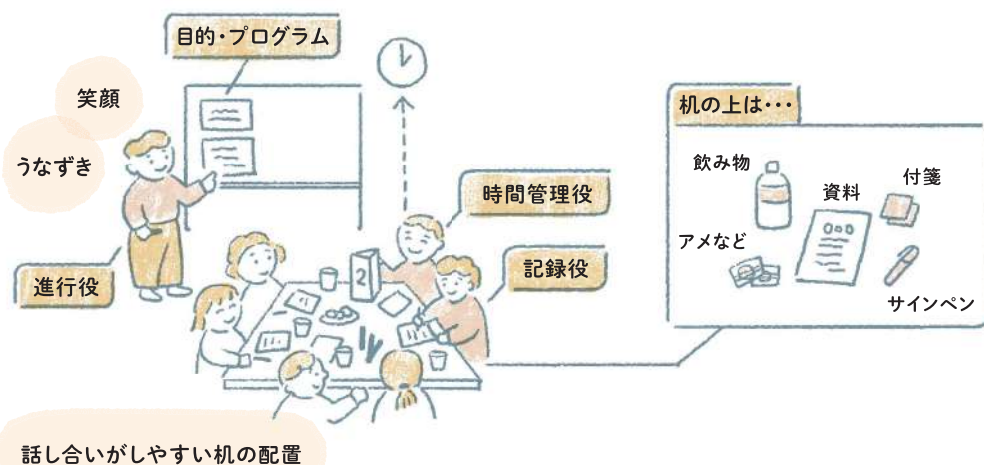
□ はじめに「話し合いのお約束」を確認しよう

「話し合いのお約束」を前に貼り出したり、資料に掲載したりして毎回確認しよう。

- 一人の発言はほどほどにし、みんなで議論することを大切に。
- お互いを尊重し、いろいろな考えがあることを理解し、攻撃的な否定をしない。
- できていないことをどうしたら改善できるのかを前向きに話し合おう。
- 全体の進行がスムーズにいくように協力しよう。

□ かたい空気をやわらかくするコツ

- まずは進行役から元気に明るくあいさつしよう。
- 30秒ほどの自己紹介や近況報告で、緊張感をやわらげよう。
- 合間にちょっとした運動を取り入れて、体も頭もやわらかく。
- テーブルの配置をコの字ではなく島型に配置するなど、レイアウトを変えてみよう。



6

ヒント

意見を書き出して、みんなで共有しながら進める

当日運営

各地の事例

□ 「付箋ワーク」で地域ケア会議を自分ごとにする

ケースに対して専門職から助言する形式ではなく、問題解決型で話し合いをしています。参加者が対象ケースの課題を付箋に書き出して共有し、会議の場で優先順位を付けた上で「いつどこで誰が何をするか」を決めるようにしています。

宮城県石巻市

改善のヒント

□ 付箋を使って各自の意見を出してもらおう

- 付箋を使うと、全員の意見を出し合うことができる。
- 付箋は1枚に一つだけ意見を書くと、分類整理できる。
- 誰かに1枚内容を紹介してもらい、次に関連する意見や似た意見を出していってもらいと、整理しやすい。
- 付箋はホワイトボードや模造紙に貼り出しながら整理しよう。

STEP
1

5分くらいで意見を付箋に書き出す

1枚に1意見

STEP
2

1枚ずつ確認しながら意見交換



□ みんなの議論を見やすく書き出して共有しよう

- どんな発言があったのかがわかるように、ホワイトボードや模造紙に意見を書き出そう。
- 簡単でも、書き留めることが大切！
- 大切なところを太字や色で強調すると、重要な点がわかり、話し合いを進めやすくなる。



お悩み 話が別の方向にいつてしまう

ヒント

7

会議の目的と目指す成果に立ち戻ってみよう

当日運営

各地の事例

□ みんなの議論を促す役割の人がいる

県の研修に参加した地域包括支援センターの職員が会議のコーディネーター（ファシリテーター）となり、議論を促す役割を担っています。 山形県長井市

□ 本人や地域が実践可能なアドバイスに視線を向けよう

施設・病院内での好事例は、理想的だけれど実践のハードルが高い。地域に多い「独居や老老世帯でも実践できること」を意識した改善のてだてをみんなで考えよう。 ワークショップのアイデア

改善のヒント

□ 目的と目指す成果を確認しよう

- 「今日の会議の目的と目指す成果」をいつでも確認できるよう、見やすい位置に貼り出しておこう。
- 話が脱線しそうになったら、振り返ろう。
- 時間管理役の人の「そろそろまとめの時間です」という発言を合図に、今日の議論を振り返ろう。

□ 改善のアイデアを前向きに考えよう

- できていないことを探すのではなく「少しでも改善するにはどうしたらいいのか、アイデアを出し合いましょう」と声かけしよう。

□ 会議を推進するファシリテーターを導入しよう

- 会議を推進する役割「ファシリテーター」を研修で育成し、地域ケア会議にも導入しよう。

お悩み 何から手をつけたらいいの？

ヒント

8

会議の記録を作り、フィードバックしよう

会議後・地域づくりへ

改善のヒント

□ 会議の記録を作り、フィードバックしよう

- 会議の最後に、成果や把握した課題などを振り返り、記録しよう。
- ホワイトボードや模造紙の書き出しは速報記録として写真にとって共有できる。
- それぞれの関係者に会議の記録を共有し、できることを考える機会につなげよう。



□ 課題とアイデアをストックしよう

- 把握した地域の課題や課題解決のアイデアをストックしていこう。

9

ヒント

お悩み 地域課題解決にどうつなげたらいいの？

生活支援コーディネーターと協力して、地域の実情に合わせて、少しずつできる取組を考えていこう

会議後・地域づくりへ

各地の事例

□ 「立ち話&お茶飲み会」で話してみよう

地域づくりの核となっているのは、行政、地域包括支援センター、生活コーディネーターの「会議の場以外での立ち話」や「お茶を飲みながらの情報交換の場」です。普段からのコミュニケーションを通して、地域に何が必要かを考えて、お互いに協力して動くようにしています。 青森県蓬田村

□ 生活支援コーディネーターが協議体への「橋渡し」をする

地域ケア会議で議論した課題の中で、住民同士で対応策を話し合ったほうがよい事柄については、生活支援コーディネーターが協議体へ橋渡しし、協議体での議論につなげています。 岩手県九戸村

改善のヒント

□ 会議が終わった後に、お茶飲みタイムをしてみよう

- お茶やお菓子を用意して、リラックスして会議を振り返ることで、次につながるヒントが出てくるかも。

10

ヒント

お悩み 地域づくりや政策提言にまでつなげられない

年ごとの課題と成果を振り返り積み重ねていこう

会議後・地域づくりへ

各地の事例

□ 地域ケア推進会議をあえて村の予算検討時期に開催

地域ケア推進会議を11月末～12月(次年度予算検討の時期)に開催しています。会議内容は村長に報告し、必要に応じて他局(医療局等)へも次年度の取組として申し入れをしてもらっています。地域ケア個別会議等で地域課題の抽出まで終わらせ、推進会議に挙げるべき課題はそこから村職員が抽出しています。 岩手県九戸村

□ 小さな「地域づくり」の成果を評価し積み重ねよう

「新しいつながりが生まれた」「新しい場ができた」「少し前進できた」という、小さく思えることも、地域づくりの一つの成果だと評価して、次の取組へつなげていこう。 ワークショップのアイデア

改善のヒント

□ アイデアを政策提言や実現につなげる流れをイメージしよう

会議ではこんなことも話し合ってみよう。

- どんな受け皿、支援があったらいいだろう？
- 課題解決のアイデアをストックして、良いタイミングで拾い上げるには？

□ 地域ケア会議を意識的に開催し、検討素材を集める

- 地域ケア会議でケースを検討し、2～3回もしくは6～7件事例が集まったら共通点を整理してみよう。
- 課題解決のための多職種連携ルールづくりや、地域への支援事業の可能性を考えてみよう。

さいごに



後藤 純さん

Jun Goto

東海大学建築都市学部建築学科
特任准教授
東京大学高齢社会総合研究機構
客員研究員

介護保険制度においては、家族介護力はゼロとして考えます(家族に依存せず社会全体で支える)。キーワードは自立と尊厳です。尊厳とは、その人らしく生きること、暮らしきることです。

しかし「あなたらしさとは?」と問われても、私にもはっきりしたものはありませんし、それを第三者がたった1回のケア会議で見つけ出して適切に支えるのは難しいです。生きることは、個人的であり、複雑なことです。そのような「生きること」を支援するには、当事者、地域住民、専門職そして制度が、伴走的(寄り添い)・重層的に当事者と関わることが必要です。当然介護サービスだけでは不十分です。本人が慣れ親しんだ地域の資源を包括的に活用したケアが必要となります。

当事者の「よくなりたい」・「こういう暮らしがしたい」・「長生きしたい」という気持ちは、専門的な治療や処方だけでは引き出せません。

地域ケア会議と生活支援コーディネータの協働の最優先事項は、当事者、地域住民、専門職や行政が、自分のまちで「自分らしく暮らしきる」イメージを育み、共有することではないでしょうか。



東北地方の市町村の取組事例やワークショップの意見交換を参考にヒント集をまとめました



このヒント集は、東北地方の市町村へのヒアリング調査の結果や、秋田県での2回のワークショップの結果を参考にまとめました。

ワークショップには地域ケア会議に関わる行政職員や専門職が参加し、地域ケア会議をさらに有効な場にしていくために必要な準備・運営等のポイントを話し合いました。

ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

(第1回: 2023年12月19日 / 第2回: 2024年1月10日)

地域ケア会議に参加する皆さんへ

このパンフレットは、地域の介護予防にかかわる、市町村の担当者、地域包括支援センターの職員、生活支援コーディネーター、地域ケア会議に参加する専門職等に向けて、大きく4つの内容が書いてあります。

1/ これからの
地域づくりで
大切なこと

P1～3

2/ 地域ケア会議と
生活支援体制
整備事業の関係

P4～5 ★

3/ 地域の課題を
見つける
地域ケア会議
のポイント

P6 ★

4/ 地域ケア会議
もっとよくする
10のヒント

P7～14

このパンフレットを地域ケア会議の参加者と一緒に読んで、どのような会議にしたいかイメージを共有してみてください。★:生活支援コーディネーターにおすすめ

このパンフレットの内容の詳細は、事業の報告書としてウェブ上に公開しています。
行政において地域ケア会議のあり方について検討される場合は、あわせてお役立てください。

参照 令和5年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業
「地域ケア会議と生活支援コーディネーターの協働に関する調査研究事業」
<https://www.nttdata-strategy.com/roken/index.html>

参考文献等 「介護予防・日常生活支援総合事業のガイドライン」(厚生労働省)
「地域包括支援センターの設置運営について」(厚生労働省)
「地域ケア会議運営マニュアル」(一般財団法人長寿社会開発センター)
厚生労働省ホームページ「地域包括ケアシステム」、「総合事業(介護予防・日常生活支援総合事業)」

地域ケア会議 もっとよくするヒント集

～100歳まで自分らしく暮らせる地域づくりを実現するために～

令和5年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業
「地域ケア会議と生活支援コーディネーターの協働に関する調査研究事業」
令和6(2024)年3月発行

株式会社エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所 ライフ・バリュー・クリエイションユニット

編集:(株)石塚計画デザイン事務所
デザイン: karako design works